

●基調講演 2 (120 分)

「時空モデルによる千年企業と多国籍企業の経営戦略比較」

講演形式

講演者:伊藤 清彦 氏(ハワイ大学マノア校 シャイドラー・カレッジ特別教授)

司会:新藤 晴臣 (大阪市立大学)

[概要]

10月17日(土) 14:30~16:30 A会場

今から300年以上前に井原西鶴が『日本永代蔵』(1688)で著したように、ビジネスを長期間続けるのは非常に難しい。この研究では日本の「千年企業」8社(最低500年以上続く老舗、延べ約6,000年の経営寿命)を選び、その超長寿の要因をオーナー当主自身に語って頂いた。千年企業の経営は「国内中心、地元重視、伝統的産業、ローテクノロジー、小規模、寡産(少品種)、低成長、会社存続が目標、先祖による企業統治、独立した企業生態系、超長期サプライヤー関係、恒常性、イノベーションをしない為のイノベーション」に要約される。これらは、現在MBAで教えられている国際企業戦略とは多くの相違点があり、グローバル競争に打ち勝つ戦略は、会社の超長寿には繋がりにくいというパラドクスを説明する。

物理学の相対性理論では運動のスピードによって時間の進み方に違いが生じ、光の速さに近づくと時間が遅れ寿命が伸びるとされるが、経営の「時間」と「空間」には負の相対関係が見られる。グローバル企業が売上や利益といった「経営空間」を拡げようとすれば、他社との競争に打ち勝つために経営スピードの加速が要求される。しかし経営速度が増すと、「経営時間」すなわち企業寿命が短くなり、その一方で企業寿命を延ばそうとすると、逆に経営空間の縮小が最適の選択となり、現存する千年企業のように経営速度が遅くなるという傾向がある。

千年企業各社に類似した特徴を、従来から使われている経営戦略分析手法で業種、戦略、経営資源、組織形態の4種の要因にまとめると、それぞれの要因が同時に互いに融合して、その適合と一貫性が超長寿の原動力となっている。更に千年企業の戦略の歴史的形成過程を経済的、社会制度的、心理的刷り込みと、連綿と伝えられる組織の記憶という項目に分けて考察する。

千年企業の戦略は、「限られた経営資源の統合」と「ローカル市場への集中」だが、多国籍多角化企業は、「グローバル市場指向」と「市場の拡大」を目指している。つまり企業の経営分析や評価をする上では、地理的及び産業の経営空間を狭くして資源集中して長寿を求めるか、広く拡散して利益の拡大を求めるかという2面性の考慮が必要となる。「経営時空モデル」は、この企業の空間的側面(事業の多角化や国際化の程度)と、時間的側面(創業以後の時間的継続)の2軸を用い、異なった企業群によってそれぞれの企業戦略がどの様に位置付けられるかを示す狙いがある。

【参考文献】

伊藤 清彦, L. ローズ・エリザベス.

組織所有構造の時空的考察.2014年 48巻 1号

<https://ci.nii.ac.jp/naid/130005002735>